

## 認識の因果論

—アドヴァイタ派の見解をめぐって—

佐藤裕之

## 1. はじめに

インドの認識論一般において、認識手段は認識を生み出す最も有効な原因、固有の原因であり、認識と認識手段の二項目に因果関係を認める。この点は、種のレベルで一層判然とする。例えば、*Tarkasamgraha* は、認識を知覚等の四種に分類し、これらに対応して、認識手段も知覚手段等に分類するが、ここで意図されているのは、ある認識が知覚手段から生じたのであればそれは知覚であり、ある認識が知覚であればそれは知覚手段から生じたということである。そして、認識手段は認識を生み出す原因であると同時に認識の性格の決定者でもある。

一方、他学派に比して認識論の形成が遅れたアドヴァイタ派の中には、見解を異にする一派があった。この派はシャンカラ以降、バドマパーダ系のヴィヴェラナ派 (=V派) とヴァーチャスパティミシュラ系のバーマティー派 (=B派) の間に解釈の相違が見られたが<sup>1)</sup>、その一つが、認識の因果関係をめぐる相違である。V派の綱要書 *Vedāntaparibhāṣā* (=VPBh) が述べるところによれば、解脱をもたらす認識は直接的認識 (=知覚) でなければならず、この認識の手段を、V派は「お前はそれである」等の文章であると考え、B派は浄化された内官であると考えた(9, 13)<sup>2)</sup>。B派が内官を感官の一つとし、直接的認識の手段を浄化された内官と考えたのは、一般的見解に従うものと考えることができる。しかし、V派は文章も直接的認識の手段であると考えた<sup>3)</sup>。ここで、文章は認識を生み出すものであるが、生み出された認識は手段とその性格を異にし、認識の性格の決定者とはならない。一般的見解によれば、文章は間接的認識の手段であって、直接的認識の手段ではない。文章が直接的認識の手段であるなら、クタジャの種からヴェタの芽が生じることになってしまう<sup>4)</sup>、といわれる所以である。

本稿は、V派のこの特異な説に注目し、認識をめぐる因果論をVPBhを中心にして検討を加えるものである。

## 2. 原則：認識の直接性は手段に起因する

まず、B派の一般的見解を見てみよう。B派の見解は、「認識の直接性は、特定的手段[からの生起]に起因するであって、特定の対象に起因するのではない」(9, 16)という原則に基づいている。〈特定的手段〉とは、感官あるいは感官と対象の接触である。この原則に従えば、「〈これはあのデーヴァダッタである〉等の認識は、文章から生じる認識であって、知覚ではない。感官から生じないからである」(1, 60)、「感官から生じることだけが認識の直接性の決定者であるから、文章から生じる認識は間接的である」(9, 17)と述べられるのも当然である。細かい文字等の同じ対象であっても、感官が正常であればそれを知覚し、障害があればそれを知覚しない、という日常の観察がこの原則を支持する(9, 16)。

このように、認識手段と認識の間に因果関係を認めることは、次のことを意味する。直接的か間接的かという認識の性格は、それ自身では決定せず、どのような認識手段から生じたかという点によって決定する。認識対象についていえば、認識が生起する以前にその性格が決定しているわけではなく、認識の性格に基づいて認識対象の性格も決定される。例えば、「これは牛である」という認識はいずれかの性格をもった認識であるが、認識自身から性格は決定されない。感官という認識手段から生じたのであればこの認識は直接的であり、他の手段から生じたのであれば間接的である。そして、〈牛〉という認識対象も、〈牛〉を対象とした認識が直接的であれば直接的であり、間接的であれば間接的である。

## 3. 原則：認識の直接性は対象に起因する

一方、V派の見解は「認識の直接性は、特定的手段からの生起に起因するのではなく、特定の認識対象に起因する」(9, 14)という原則に基づいている。従って、「結果である認識が知覚であるならば、その手段も知覚手段であるという原則はない」(6, 12)と述べられる。

このように、認識の直接性が対象に起因するということは、次のことを意味する。認識の性格はそれ自身では決定せず、どのような対象を認識対象とするかという点によって決定し、認識手段は認識の性格の決定者ではない。認識対象についていえば、認識が生起する以前にその性格は決定している。B派の場合には、直接的な認識手段から生じた認識が直接的であり、直接的な認識手段が機能した対象が直接的である。認識が直接的であれば対象も直接的であり、対象が直接的

であれば認識も直接的であるという点は、両派に共通している。しかし、V派では、直接的な認識が生じる以前に、対象は直接的であるのに対して、B派では、直接的な認識が生じた後に、対象は直接的であるとみなされる。ここに両派の根本的な相違がある。そこで、直接的な認識が生じる以前に、直接的である対象とはどんな対象なのか。それは次のように論じられる。

#### 4. 対象の直接性

対象の直接性については、すでに、*Pañcapādikāvivarāṇa* 等に言及があるが<sup>6)</sup>、VPBh の中でまず第一に注目しなければならないのは、対象の直接性の定義である。V派では、唯一である絶対精神 (=ブラフマン) を添性の違いによって、①水瓶等に局限された〈対象としての絶対精神〉、②内官の変容に局限された〈認識手段としての絶対精神〉、③内官に局限された〈認識主体としての絶対精神〉という三つに分類するが(1, 17)、対象の直接性の定義は、①と③に区別がないことである(1, 41)。「ブラフマンは〈認識主体であるジーヴァ〉と区別がないから、文章から生じる認識の対象がブラフマンであれば、[〈お前はそれである〉等の]文章から生じる認識も直接的である」(9, 15)と述べられている通りである。〈区別がないこと〉は、〈同一であること〉ではなく、〈異なる *sattā* を持たないこと〉であると補足説明される(1, 43)。

第二に対象の直接性について注目しなければならないのは、〈感官との接触〉である。VPBh には次のような言及がある。「〈お前が十番目である〉等の場合、対象は「感官と」接触しているから、文章からも直接的認識が生じると認められる」(1, 30)、「〈これはあのデーヴァダッタである〉という文章から生じる認識の対象は「感官と」接触しているから、外に流出した内官の変容が認められる。従って、〈デーヴァダッタに局限された絶対精神〉と〈変容に局限された絶対精神〉に区別はないから、〈これはあのデーヴァダッタである〉という文章から生じる認識は直接的である」(1, 61)。さらに、〈対象と感官の接触〉は、内官の変容を生み出すものであるから(1, 57)、内官の流出があるということは、対象と感官の接触があることである。従って、「〈山等に局限された絶対精神〉と〈外に流出した内官の変容に局限された絶対精神〉は相互に区別されないから、[〈山に火がある〉という認識の場合、山という部分について認識は直接的である]」(1, 31)といわれる場合も、山等と感官の接触が意味されている。以上の点から、感官の接触した対象を直接的であると考えていたことがうかがえる。

以上のように、VPBhには対象の直接性をめぐって表面的には二説を見てとることができるが、この二説は異なるものではない。対象と感官の接触は対象と認識主体に区別がないことであると説明する注釈もある<sup>9)</sup>。そして、感官と接触した対象をもつ認識が直接的であれば、対象も当然直接的であり、上述した対象の直接性の定義に従い、対象と認識主体に区別はないことになる。ただし、V派は内官を感官とは考えないから(1, 11)、楽等の内的な対象やブラフマンは感官と接触はしない。外的な対象の場合に限って、対象と感官は接触し、その対象が直接的である考えられるだけである<sup>7)</sup>。このように、外的な対象に限って、対象と感官の接触が対象の直接性の決定者とみなされるにしても、それは、B派と決して同じではない。B派では、対象と感官が接触し、そこから認識が生じた場合、対象が直接的であると考えられるのであって、単に対象と感官が接触していればよいというものではない。例えば、眼前にいるガヴァヤと感官が接触していても、牛とガヴァヤの類似性の認識から「これはガヴァヤだ」という認識が生じた場合、認識対象は直接的ではない。一方、V派にとっては、この場合でも、ガヴァヤと感官が接触しているのだから、認識対象は直接的となる。

## 5. むすび

以上の考察から次の点を指摘する。B派では、認識手段と認識の二項間に因果関係を認め、対象の性格は認識手段や認識によって決定され、認識手段や認識の性格の決定は対象に依存しない。さらに、一つの対象に複数の認識手段が機能する<sup>8)</sup>。一方、V派では、認識手段と認識の二項間に因果関係はなく、対象は認識や認識手段に依存せずに性格が決定しており、認識の性格はその対象によって決定される。さらに、一つの対象に複数の認識手段が機能する。なお、V派では、「変容が異なるだけで、認識手段が異なることは合理的に説明される」(6, 12)と述べ、認識手段と内官の変容の二項間に因果関係を認める。すなわち、V派における認識手段は内官の変容の性格の決定者でしかない。

一般的なインドの認識論は、認識手段をいわば主要なものとするのに対して、V派の認識論は、むしろ認識対象を主要なものとするように思われる。なぜ対象を主要なものとするのかという点であるが、そもそも、V派によって、ブラフマンは直接の対象であり、ブラフマンを対象とした認識も直接的である。そして、この認識は天啓聖典から生じる。この点は絶対に譲ることができない。従って、文章からも直接的認識が生じ、その直接性は対象に起因すると考えなければなら

ない。解脱をもたらす認識を特例として、一般的な認識には他の原則を求めることも可能だが、V派は特例を一般化させた。対象を主要なものとしたのも、特例を一般化させた結果である。そして、V派の認識論は特例を一般化させようとした点に問題があり、ここに認識論の形成を遅らせた一因がある。

アドヴァイタ派はブラフマンをめぐる形而上学が中心であり、認識論は従属的なものでしかない。そこで認識論に取り組もうとしたとき、特異な形而上学と矛盾しないように、その形而上学の中で、どのような認識論が可能なのか。その答えの一つが対象を主要なものとする認識論であったといえるのではないか。

- 
- 1) Cf. *Vedāntaparibhāṣā* ed. by S.S. Musalgaonkar, Varanasi, 1983 (3rd. ed.). *Bhūmikā* pp. (38)-(39). 2) 以下、括弧で囲まれた数字は VPBh(ed. by S.Sastri, Madras, 1984) の章節を示す。Cf. *Bhāmāli* ed. by J.L. Shastri, Delhi, 1980, p. 31<sup>22-23</sup>; p. 31<sup>27-28</sup>. 3) 最初に文章から間接的認識が生じ、その後直接的認識に転換するという考えもある。Cf. D.M. Datta, *The Six Ways of Knowing*, Calcutta, 1972, pp. 350-351; T.M.P. Mahadevan, *The Epistemology of Advaita*, Madras, 1957, p. 58. 4) Cf. *Bhāmāli*, p. 31<sup>26-27</sup>. 5) *Pañcapādikāvivarāṇa* (ed. by S. Subrahmanyasastri, Varanasi, 1992, p. 285<sup>17-18</sup>) には *saṃvidabheda*, *viśayasyāvyaavadhānatā*, *svasaṃvijjanakatva*, *pramāṇakāraṇendriyasamprayuktatva* の四説が言及されている。*Vivaraṇaprameyasamgraha* (ed. by R. Tailanga, Varanasi, 1990, pp. 82<sup>20-83</sup>) は対象の直接性を決定するのは、*kārakatva* と *vyañjakatva* であると述べる。*Siddhāntaleśasamgraha* (ed. by B. Shastri, Varanasi, 1989, p. 460<sup>10-11</sup>) には、*tattatpuruṣīyacaitanyābheda* と述べられている。6) *Paribhāṣāsamgraha* on VPBh ed. by P.B. Sastri, Varanasi, p. 41<sup>18-20</sup>. 7) VPBh ed. by S. Madhavananda, Calcutta, 1969, p. 20. fn. 2; *Paribhāṣāprakāśikā* on VPBh ed. by M.A. Sastri, p. 71<sup>22-24</sup>. *anupalabdhi* から生じる無の認識も直接的であるといわれる (6, 11-12)。無は外的な対象であるから、この対象が直接的であるためには、感官と接触するはずだが、無が感官と接触するとは考えていない (6, 14)。VPBh には混乱が見られる。8) Cf. *Nyāyabhāṣya* I, 1, 3. ed. by T.N. Tarkatirtha, Delhi, 1985, pp. 91<sup>5-92</sup>°.

〈キーワード〉 認識, 認識手段, 認識対象, アドヴァイタ派, *Vedāntaparibhāṣā*

(東方研究会専任研究員)